

掲載：『図書新聞』第2411号 1998年10月24日

書評 ユルゲン・クチンスキー著『回想録 1945-1989 正統派の異端者』照井日出喜訳、大月書店、1998年

平子友長

著者ユルゲン・クチンスキー(1904-1997)は、『資本主義下における労働者の状態の歴史』(全40巻)をはじめ百冊を越える著作によって世界的に著名な旧ドイツ民主共和国の経済史研究の第一人者であった。本書は彼の『回想録 1904-1945』(第1巻、1973年)に続くその第2巻であり、それはドイツ民主共和国の歴史と重なる。生前ウルブリヒトやホーネッカーといった最高政治首脳者たちと深刻な軋轢を繰り返しつつも個人的交友関係を維持し続け、同時にドイツ民主共和国を代表する経済学者、歴史学者として国内的国際的に超人的な学術活動を展開した(1980年代には何度かノーベル経済学賞の候補に挙げられたことさえあった)著者の『回想録』は、読み物として文句なく面白い。しかもそれはドイツ民主共和国の歴史を研究するための第一級の資料である。著者はそれを明白に意識して、本書を基本的に著者自身の過去の日記からの引用のみによって構成し、現在の時点から当時の活動を批判的に評価することは意識的に禁欲している。それはいかにも歴史家クチンスキーにふさわしい。クチンスキーその人と『回想録』の内容については、訳者である照井日出喜氏が「あとがき」で実に要をえた解説を加えているのでここでは繰り返さない。以下では、『回想録』の資料的価値について私見を述べてみたい。

社会主義の歴史の中でこれまでその存在さえも認められてこなかったものが、「体制内批判者」ともいうべき知識人の存在である。その体制批判的な言動のために共産党指導部によって党籍や公職の剥奪、投獄、国外追放などの公然とした迫害の対象となった「反体制的知識人」とは異なり、彼らは、基本的には党内に留まり、大学や研究機関の研究者として、あるいは独立の作家や芸術家として、いわばマルクス、レーニンなど体制公認の言説を駆使しつつ党指導部批判を隠然と展開した知識人のことである。とはいえ「反体制的知識人」と「体制内批判者」との区別は流動的であるにすぎず、「体制内批判者」はいつでも政治権力者によって「反体制的」の烙印を押され、迫害の対象となる危険があったし、裏切りや密告が奨励されていた体制下では「体制内批判者」と「体制内同調者」との区別もまた曖昧にならざるをえなかった。こうした「体制内批判者」の批判の自由は党指導部の気まぐれな「恩寵」と時々の政治的言論状況とに依存していた。後者の状況を規定していたものの一つが、いわゆる大物知識人たちの発言であった。国際的に、とりわけ西側世界で高い評価を得た学術的業績、弾圧下の非合法活動時代における輝かしい党歴、政治局メンバーとの個人的知己など(クチンスキーはこれら三条件をすべて兼ね備えていた)によって党内の異端審問官たちの迫害から相対的に安全であった彼らが、どれだけ批判的自由の言説空間を獲得することができたかによって、「体制内批判者」の運命が左右されたとさえいえる。『回想録』ではクチンスキーは「路線に忠実な異端者」と自己規定しているが、私のいう「体制内批判者」たちは、ホーネッカーの政治報告のゴーストライターとなることもなく、「好きなように書くこと」を許されなかった知識人たちのことである。

私がこうした「体制内批判者」の存在に瞠目したのは、1985年8月から1年間東ベルリンのフンボルト大学の経済学部と哲学部に留学する経験をする機会を持ち、同地の研究者たち

と親しく交流する機会を持ったことに由来する。『回想録』第7章に該当するこの時代は、党指導部と「体制内批判者」との隠然たる闘争が言論の「内乱」状況を醸しており、党指導部の検閲は出版された言説において厳格に維持されていたものの、大学での講義、研究会での討論など口頭の言説においては前者とは全く異なる「自由な批判」が良心的で勇気ある人々の間で展開されていた。留学前にすでに書物を通して知っていた著者たちに直接会って話してみると、彼らがしばしば著書や論文とは異なる思想を抱いていたことを経験して、私は日本における学術出版物のみに基づく社会主義研究なるものの空しさを思い知らされた。

『回想録』234 ページに見られる日本のマルクス主義者の研究水準の低さに対する痛烈な批判も、その理由の一つは、日本のマルクス主義者の多くが社会主義諸国で実際に生活した経験を持たず、社会主義諸国の出版物の記述をそのまま現実(筆者の本心)と誤認してきたことに由来している。

社会主義の日常生活における「書」と「話」の乖離は、政治権力者による思想・表現の自由の抑圧に対する市民たちの受動的抵抗の結果生じたものであり、とりわけ知識人たちにとってはこれが「自由な」知識人としての尊厳を守るための最後の防衛線でもあった。彼らは「書」のレベルでは「奴隷」の言説を弄しても、「話」のコミュニケーションにおける誠実さを守りぬくためには生命さえ賭けたのである。『回想録』にも頻出する信頼できる友人の安否をきずかう篤い友情は、こうした関係の中で育まれたものであった。社会主義体制の本当の歴史を探究しようとする者は、「話」から乖離した「書」の言説をもう一度「話」のレベルにまで立ち返って解読するという厳しい暗号解読の作業を自らに課さなければならない。『回想録』の第一級の歴史的資料たるゆえんは、それがこうした暗号解読のコードの一つを提供してくれることである。

本文を書きながら、私は1985年12月ベルリンのヴァイセンゼーにあるクチンスキー教授のお宅を訪問した時のことを思い出していた。マーグリット夫人も交えて二時間ばかり、歓談した。高齢でありながらご夫妻ともなお潑刺としておられたこと、ご家庭の質素で静謐なたたずまいが、深く心に刻まれている。それからの一二年余の間に社会主義体制は崩壊し、ご夫妻もまた帰らぬ人となった。今回照井日出喜氏の名訳によって読書界にもたらされたこの『回想録』が、日本における社会主義研究の新しい水準での出発のための格好の資料として活用されることを心から願ってやまない。